

狀を祭し、乃ち卯辰山を開拓して之を経營せんが爲、三浦八郎左衛門・不破亮三郎に主務を命じた。この開拓は四月天満宮の造營に初りて九月廿三日に成つたに起る。又六月十一日には病院の工事に着手して十月に成つたから、之を養生所と名づけ、醫育の機關たる醫學局と、藥草栽培の所たる藥園とを附屬せしめた。翌明治元年春又城南笠野村にあつた撫育所を谿谷の間に移し、尋いで山麓に陶器・漆器・綿・綿布・羅紗・紙・顔料・瓦・油・蠟・茶・釘・鏡・刀劍・硯・錦繪等の工場商舖を設けしめ、劇場・旗亭・茶店等各種の娯樂機關亦之に交つた。土工の初められた時、市民冥加と稱して之に加るもの前後四五萬人に上り、歸厚坂・千軒坂・子來坂等を開鑿した。明治三年七月初めて東御影町・常盤町・梅谷町・粒谷町・末廣町・玉兎町・御廻町・子來町・九軒茶屋などの町名を立て、一時幅輻の地となつた。然るに廢藩の後交通不便の爲に追々移轉し、六年秋墓地に定められて一層衰微した。今山頂の平坦なのは、この開拓の名残である。

ウタツヤマカイタクロク 卯辰山開拓録
一冊。慶應三年前田慶寧が命じて卯辰山上を開拓し、市街を設け、養生所・招魂臺・産物集會所・撫育所等を開いたことを載せてある。序文の養霞山人はこの工事を督した内藤誠左衛門であり、跋文の石川兒遊は出板元である。明治二年刊行。

ウタツヤマサンノウ 卯辰山山王・金澤觀音山なる觀音院の本地堂傍に在つた小祠で、實は豊臣秀吉を祀つたものであるといふ。祭禮は野町神明宮の神職多田氏が之を行ふ例であつた。明治元年神佛混淆禁止の事あつた

後、社號を豊國神社と號して豊臣秀吉を主神とし、之を舊觀音院の本堂に移し、後十九年社殿を殿町に建て、遷座せしめ、四十年又卯辰神社を併合して卯辰山の地に移した。

ウタツヤマシヨウコンシヤ 卯辰山招魂社
↓シヨウコンシヤ 招魂社。
ウタツヤマヒンビヨウイン 卯辰山貧病院
↓イガクカン 醫學館。

ウタツヤマヨウジヨウシヨ 卯辰山養生所
慶應三年十月卯辰山養生所が起つて病院を経營し、又從來壯猶館に附屬した醫育の機關もこゝに移つて、兵學と醫學の研究が截然分離することになつた。黒川良安・津田淳三・太田良策・田中一庵相繼いで之が棟取に任ぜられ、建物は數棟の病室を別つて上中下の三等とし、別に診察室・手術室・調劑室・醫員室・宿直室・看護夫室・事務室・浴室・炊事場・精神病者室があつた。醫學局は之に附屬し、分かつて教室・寄宿舎・教員役宅とし、又藥圃・倉庫局・雷頭局・醋酸局・普請局があつた。倉庫局は主として製藥の事に當り、高峰元稜主任となり、丘村隆桑・遠藤虎次・旗文次郎之に参加し、製藥の種類は硫酸・硝酸・鹽酸・舍利別・丁幾・越幾斯類であつた。撫育所も亦この養生所の所屬である。養生所は三年二月まで繼續したが、大手町に移つて醫學館になつた。

ウタナミノジソウドウ 歌波の地藏堂 鳳至郡稻舟に在る。能登誌に、『塚田村より少し行けば、磯に歌波の濱とて、此所に歌波の地藏といふあり。厄神除の本尊として利益ありとて、打寄する波の普歌のやうに聞えて告有しより名とすといへり。但し地藏といへども、神跡は人丸明神の像石なりともいへり。其像

さだかに分らず。』と見える。婦人乳汁の不足なるとき祈るに驗があるといふ。

ウタニ 宇谷 江沼郡那谷谷の中に屬する部落。
ウタニイシ 宇谷石 江沼郡宇谷から産する石材。石英粗面岩質の凝灰岩で、帶淡青色の石基中に草色の礫狀物質を混じ、稍硬質である。

ウタニガハ 宇谷川 江沼郡瀧原より發し、宇谷を經るもので、那谷川に合し、那谷川はまた動橋川に入る。
ウタニジ 宇谷寺 江沼郡宇谷にあつた。源平盛衰記涌泉寺闘諍の條に、『岩本・金劍・下白山・三宮・奈谷寺・榮谷寺・宇谷寺、三寺四社の大家も馳集り同意しけり。』とある。又白山記に『三箇寺・那谷寺・温谷・榮谷云々。』と記される温谷寺、及び白山記の奥書に、『永享十一年六月九日於加州温谷護法寺護摩堂上閑室・此本闕如間染筆了。』と記される護法寺も皆宇谷寺のことである。護法寺を宇谷寺とも温谷寺ともいうたのは、涌泉寺を鶴川寺というたと同例である。今同村に在る白山社は、この寺の鎮守の遺であらう。

ウタヒソメ 謡初 正月二日の夜城中に行はれた。能役者は八ツ半時に仕出し、江戸・京の御抱役者も來藩出仕することがあつた。七つ時過に年寄以下登城する。準備成る時は藩侯大廣間に出席し、板敷敷居際に列座する年寄以下に近く寄るべきことを命ずる時、皆敷居内に膝行着席する。謡初の儀が四海波の小謠から初る時、表小將は藩侯に島臺・吸物・取肴を供し、大小將は年寄に吸物を供する。是に於いて藩侯は盃を賜ふことを告げ、年寄・

家老・若年寄順次に盃と取肴とを受ける。この間に高砂の囃子、松高き小謠が進み、若年寄の賜盃終らんとする頃に囃子の東北が終り、次いで小謠の間に、奏者・奉行・頭役等二人宛御流れを頂戴し、役者は大土器に酒を注ぎたるを上座より廻はし、御流頂戴の終る頃に囃子の囃子を初め、同時に島臺・吸物・銚子を撤し、舞納めたるを見て、若年寄から目錄を大夫に與へ、且つ藩侯に對して『何某御目錄頂戴仕難有奉存』と言上する。是に於いて藩侯『今晚は首尾能』と告げ、筆頭の年寄之に答へ、次いで藩侯は居室に入るのである。もとは松囃子ともいつたが、前田齊泰の文政十二年から小謠のみになり、従つて謡初とばかりいふことになつた。

ウタヒヨウリツ 謡要律 一冊。安永八年九月菅野恭忠著。恭忠は音韻學を田中朋如に修めて之に精進して居たから、世の謠曲者流が只管節博士の練習にのみ没頭し、發聲の理に暗きを遺憾としてこの書を著したもので、初に音韻に關する一般的理論を説明し、終に謠曲の實例に就き、その閉合弛張大小高低の法を詳述してある。富田好禮の序、伊藤暇の跋が附せられる。

ウタマクラ 歌祝 八雲御抄に就いて加賀・能登二國に屬する歌枕を見ると、加賀にはしら山・となみ山・しの原・あたかの橋があり、能登にはのとのしま山・にしき川・いはせの渡・ながはまの浦・すずの海がある。但ししら山は越前として載せられてゐる。

ウチイヘクラノジヨウ 氏家内藏允 天正十八年初めて前田利家に仕へ、度々祿を増して五百五十石に至り、正保元年歿。子孫相繼